AIN SHAMS UNIVERSITY

AIN SHAMS UNIVERSITY
مركز بحوث الشرق الأوسط
MIDDLE EAST RESEARCH CENTER
MERC

Middle East Research Journal

Refereed Scientific Journal (Accredited) Monthly

Vol. 93
November 2023

Issued by
Middle East
Research Center

Forty-ninth Year
Founded in 1974

Issn: 2536 - 9504
Online Issn: 2735 - 5233

الدراسات اللغوية

LINGUISTIC STUDIES

日本古典文学における桜像に関する一考察

A Study on The Image of Cherry Blossoms in Classical Japanese Literature

دراسة صورة زهرة الكرز
في الأدب الياباني الكلاسيكي

هبة الله أبو بكر محمد

مدرس مساعد بقسم اللغة اليابانية

كلية الألسن - جامعة عين شمس

Hebatallah Abou Bakr Mohamed

Assistant Lecturer at Ain Shams University,

Faculty of Al-Alsun, Japanese Language Department

hebatallah@alsun.asu.edu.eg

www.mercj.journals.ekb.eg

Abstract:

The cherry blossom known as "Sakura" is one of the most important symbols of Japan. When we mention Cherry blossoms, the first thing that comes to mind is the spring season in Japan. “Sakura” has been embedded in Japanese culture since ancient times and it has been widely celebrated in Japanese folklore, literature, poetry, and art. That's why it's no wonder that the symbolic image of Sakura has evolved over time in response to cultural, social, and historical changes in Japan throughout the ages .

There are many researches that focuses on studying the image of the cherry blossom in Japanese literature, by selecting a literary work, and analyzing the image of cherry blossoms in this work. However only a few of these researches have been interested in studying the evolution of cherry blossoms Image in Japanese literature throughout the ages. Therefore, this research focuses on drawing a comprehensive picture of the evolution of cherry blossoms in classical Japanese literature, starting from the Nara period (710 AD-794 AD) to the Edo period (1603-1868 AD), Through selecting and analyzing the cherry blossoms examples in the literary works published in these periods.

The study also aims to clarify the characteristics of the symbolism of the cherry blossoms image portrayed in classical Japanese literature and its evolution. This symbolism of the Sakura image includes two contradictory aspects. On the one hand, there is a positive symbolism, that is represented in the happy bright image of the beautiful cherry blossoms; and on the other hand, there is a negative symbolism, which is the sadness and darkness that stems from the short-lived enjoyment of such beauty (as cherry flowers only blossoms for two weeks). This double-sided symbolism and its influence can be seen reflected on the Japanese character as well as its literary works.

Key words: Japanese classical literature, Changing eras, Image of cherry blossom, Mythology, Waka poems, Narrative

アブストラクト:

日本の春と言えば、最初に頭に浮かぶ桜は世界各国で植えられているが、この花は日本文化の最も重要なシンボルの一つとしてみなされている。桜は古代から現在に至るまで日本の文化や思想と密接に関係しており、その関係が時代を超えて発展してきたと共に、桜像とその象徴性も発達してきたといえる。桜が和歌をはじめ物語や小説などの日本文学の様々な種類に描写されることは当然ではないであろうか。

日本の文学作品を一つ選び、その作品に描写されている桜像の分析を通して、日本文学における桜像を考察する研究が数多くあるが、これらの研究のうちに、日本の様々な時代を超えて桜像の変遷の段階を考察する。本研究は、奈良時代（710年～794年）から江戸時代（1603年～ 1868年）にかけて日本古典文学に桜像がどのように変化してきたのか検討することを目的としている。

それに加えて、開花から散るまでの期間は2週間足らずである桜は相反する二つの像が共存するさまを象徴しており、それが美しくて明るい像と、憂鬱な像である。本研究は、日本古典文学に描かれている桜像の象徴性の特徴とその変遷を明確にすることも目的としている。

キーワード: 日本古典文学、時代の変化、桜像、神話、和歌、物語

日本古典文学における桜像に関する一考察

時代が変わると共に、政治的・経済的・社会的な事情が変化し、その変化が各時代の文学作品に影響を与えるに違いない。本論では日本の連続時代に属する様々な文学作品を時系列順に述べ、その作品における桜像とその変遷を考究する。

1. 日本の文学における桜像に関わる先行研究

日本古典文学における桜像を論じた研究が種々あり、それぞれの研究者が特定の研究ポイント・目的を設定した。立花志保（2002年）は、『古今集』に記録される小町が詠む桜歌の解釈を通して小町自体を捉えることを目的とした。立花志保は、考察した『古今集』における桜歌の特徴と小野小町の歌の特徴を比較することにより、小町の歌も、『古今集』の歌も「咲く桜」と「散る桜」の状態を歌うが、「我が身」をおき、自らが桜をみていない状況を歌ったのは小町だけだという重要なポイントを明確にした。

そして、奥村英司（2012　年）は平安時代において桜にまつわる様々な歴史的な背景を調べ、同時代に編纂された文学作品に桜がどのように描写されてきたのか考察した。奥村英司の考察により、咲いている桜を詠う歌より、散る桜を詠う歌の方が多いのは『古今集』一つの特徴ということが明確になったが、彼は「平安京の桜を実景として再現することは、文学作品を通しては不可能であることと、景が言語化によって虚構化され、デフォルメされる、そこにこそ文学的想像力の本質があることも強調する。

それに対し、大石泰夫（2015年）は、「民俗のサクラと万葉集の桜」という論文で民俗伝承における桜像を確認しながら、奈良時代末期に完成したと思われる『万葉集』の漢詩文においての桜歌の表現のあり方を検討することを目的とした。大石泰夫によれば、桜は昔から日本の民族社会に繋がっており、その繋がりは、桜の開花が日本の農事暦を教えるものとしての伝承、桜木を聖なるものとみる伝承などの様々な伝承がみられるという。このような伝承から日本人は桜が「咲く」「散る」ことに強い意識を持つようになり、その意識が『万葉集』などの日本文学に現れるということである。

それに加えて、金子紀子（2016年）は平安前期に編纂された勅撰集の『古今和歌集』、『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』及び『後拾遺和歌集』においての「桜」又は「花」を詠う和歌ををいくつかの歌材、歌語の取り合わせによって抽出し、和歌史的な詠風の変化が桜歌においてはどのように表れているかを調べた。金子紀子が行った考察の結果として、四つの和歌集にみえる桜の捉え方が一様でなく、『古今和歌集』から『拾遺和歌集』に至

るまで桜歌の扱い方がいかに変わったか、それぞれの和歌集に桜の詠み方の展開及び桜歌の特徴が著しく変化したことが明確になった。

更に、平安時代は日本の国風文化が極みに花開いた時代とみなされるが、同時代は女流文学の花開いた時代とみなされる。平安時代に登場する小野小町、和泉式部、清少納言のような女流歌人・作家とその桜歌を考察する研究もある。上記の立花志保の研究に対し、金子紀子(2016年)は、和泉式部の歌群、題詠、贈答歌と独詠歌から「桜」を主題とした歌を抽出し、この歌の解釈を通して今まで十分に論じていない和泉式部の歌の特徴・本質を考察することを目的にした。金子紀子によると、和泉式部は平安時代中期の和歌集においての桜歌を強く受けたが、当時の古典的な歌い方から少し離れ、自分の特色を歌に描写し上に、情熱的な恋歌で有名な和泉式部にとって桜は唯一無二とされるが、儚くて永遠的ではなくて、和泉が桜を深く愛しても耽溺しないということである。

続いて、赤間恵都子（2017年）は、『古今集』と『枕草子』を取り上げ、両作品にある桜の用例を中心に二つの作品においての四季の捉え方を比較し、二つの作品がどのように違っているのか検討する。赤間恵都子が踏まえた上で、「咲く桜」を歌く上に、散る桜の美を見つめて歌う『古今集』に対し、『枕草子』が散らない桜を演出し、桜を当時の栄華期の象徴の一つとして描写することに基づいて、『古今集』の桜と『枕草子』の桜の特色が明確になった。

上述にみえるように、桜文学に関わる殆どの研究のうちには一つか二つの文学作品を選び、それらの作品に描かれている桜像を論じる研究もあり、二つの作品においての桜像を比較しながら、当時の桜像の特徴を論じる研究もある。しかし、日本の様々な時代を超えて桜像の変遷の段階を考察する研究が少ない。そこで、本研究は、奈良時代（710年～794年）から江戸時代（1603年～ 1868年）にかけて日本古典文学に桜像がどのように変化してきたのか検討することを目的としている。それに加えて、開花から散るまでの期間は2週間足らずである桜は相反する二つの像が共存するさまを象徴しており、それは美しくて明るい像と、憂鬱な像である。それで、本研究は、日本古典文学に描かれている桜像の象徴性の特徴とその変遷を明確にすることも目的としている。

2. 日本古典文学における桜像の変遷

日本古典文学における桜とその文学に関して考察すると、桜文学の大部分は歌・和歌の形で表現されたということが分かる。一方、指摘するべきは古典文学における桜像とその変化が完全に理解できるように、歌集に限らず、昔の物語・小説から桜の話を抜き出す必要があるのではないであろうか。従って、次に、和歌集と散文の両方を中心に桜像の変遷を考察する。

2-1. 奈良時代(710～794年):

桜という文字が日本の歴史上初めて登場するのは8世紀に成立した『古事記』と『日本書紀』の中である。一方、桜と日本或いは日本人の関係は、8世紀から1000年以上も遡る紀元前300年頃に日本列島に導入された稲作文化の時から始まったと言える。次に、奈良時代に編修された文学作品に描写された桜像を検討する。

2-1-1. 『古事記』の桜:

日本最古の歴史書であるとされる『古事記』に言及される桜が桜自体に関わらず、「若櫻の宮」、「若櫻部」などの桜の地名と「櫻井の臣」のように桜を含む人名に限られている。そして、『古事記』に記録されている 「木花咲耶姫-このはなさくやびめ」とは、日本神話に登場する女神であり、桜の木の花が咲くように美しい女神とされており、『古事記』では「木花之佐久夜毘売-このはなのさくやびめ」と記述されるが、『日本書紀』では「木花開耶姫-このはなさくやびめ」と「鹿葦津姫-かやつひめ」と呼ばれる。

その神話によれば、大山津見神は、木花咲耶姫と結婚したかった高天原から降臨したホノニニギという男神に二人の娘を献上するが、石長姫の醜さにびっくりしたニニギは石長姫を返し送り、木花之佐久夜毘売だけ結婚することを決めたという。石長姫の返し送りに怒った大山津見は二人の娘を献上した理由を「石長姫と結婚すると天の神の子が、雪が降ても風が吹いても、常に岩のように永遠に変わらず、木花之佐久夜毘売と結婚すると咲き栄える木の花がように繁栄になることを祈っていたが、あなたは木花之佐久夜毘売だけ選んだわけで天神の子の命は木の花のように散る」とニニギに説

明した。そこで、現在に昔から至るまで天皇の命が短く永久でないと思われる。

2-1-2.『日本書紀』の桜:

『古事記』に登場する桜は地名や人名に見えるのに対し、『日本書紀』における桜は美的感覚を訴える花として描写された。桜は「日本書紀」の12巻と「履中紀」と13巻「允恭天皇」に登場する。『日本書紀』巻12の「履中紀」に見える桜は最古の花見の記録とみなされる。五世紀初め頃、履中三年（402年）に磐余市磯池（いわれのいちしのいけ）に船に浮かべて酒宴を開く履中天皇の持つ酒皿の中に桜の花びらが舞い落ちると語られるが、冬の桜があるとは不思議ではないであろうか。実は前述の景色は真実の景色か創作の景色か証拠がないが、春以外に秋から冬まで季節外れに開花する桜が本当に存在するのが事実でる。

その上、桜は『日本書紀』巻13「允恭紀」でもう一度記録されるが、そこの桜は最古の桜の和歌と思われる。『日本書紀』の原文で次の通り記録される。

花ぐはし　桜の愛で　同愛でば　早くは愛でず　我が愛づる子ら

その歌には、美しい姫・女は桜に喩えるという伝統的な桜観の成立が見えるのではないであろうか。しかし、ここに注意すべきのは、この桜観は男性視点から成立し、それが『万葉集』まで続くが、『源氏物語』の作者紫式部と『古今集』で小野小町のような女性の和歌人・作者によってはそれが変化し、女性が自ら桜に自分を描写するようになる。それについて、『源氏物語』と『古今和歌集』における桜像という部分で詳しく考察する。

2-1-3.『万葉集』の桜:

奈良時代末期に完成したと思われる『万葉集』には日本の植物を詠んだ歌が多く収録されたといえる。その植物は約166種であり、その中最も詠まれたのは萩であり、その次は藤原京頃に日本に来た梅である。それに対し桜は8位を占める。

『万葉集』に登場する桜歌の数に関して白幡 洋三郎[注1]は桜歌が40首だと指摘するが、大石泰夫[注2]は桜歌は41首であることを述べた。それに対し、小川和佑[注3]、水原紫苑[注4]と重留　妙子[注5]も『万葉集』における桜歌は42首だと論じた。筆者はその差の原因が『万葉集』に桜を詠んだ歌の中に「さくら」という語以外に「はな」と書かれているが桜を指す・桜だと解釈される歌があるからであると思う。『万葉集』に記録される桜歌が41首と決定すると、『万葉集』の各巻ごとの桜歌は以下の表の通りになる。

巻3	巻5	巻6	巻7	巻8	巻9	巻10	巻11	巻12	巻13	巻16	巻17	巻18	巻19	巻20
2首	1首	2首	1首	6首	6首	9首	1首	1首	2首	2首	3首	2首	1首	2首

桜を詠む歌を検討すると、その歌の多くには「さくら」が「はな」という語と合わせて歌われたことに気付く。41首の中から「さくらはな」が22首、「さくらのはな」が14首にみえる。更に、山に加える桜は「やまさくらはな・やまのさくら」は4首にみえる。これは、５音・７音の組合せを基本とする和歌の規則に従って3音節から成り立つ「さくら」に2音節の「はな」を加えると5音節になるからである。又は、5音節の「さくらばな」に「の」と「は」の助詞を加えて7音節の「さくらのはなは」と「さくらのはなの」という組み合わせもある。更に、3・4音節の動詞を「さくら」と合わせて歌われた歌もある。例えば、3787首に4音節の「かけたる」に「さくら」を加えて「かけたるさくら」になり、3970首に「さくら」に「さける」と「を」を合わせて「さけるさくらはを」になった。

その上、「さくら」或いは「さくらばな」が2音節の「やま」に合わせて詠まれた歌もある。41首の桜歌の中に「やまざくらばな」、「やまざくら」「やまのさくら」を含む歌は6首である。それは、和歌の音節の他に、当時の桜は、江戸時代後期に開発されたみなされるソメイヨシノではなく、山桜のみであったからである。 そして、桜歌の中には香具山、竜田山、春日山、生駒山、高円山、絶等寸山、阿保山、佐紀山、青山という様々な山に咲く桜を歌うのが20首に記録された。一方、その歌に詠まれた山桜の中に現在では桜木が消えた山がある。例えば、巻8・1440首と巻10・

1866首は、天平頃に聖武天皇の離宮があったところとされる高円山の桜花を描写するが、現在では、高円山は桜の代わりに萩の名所として知られている。

春雨の、しくしく降るに、高円の、山の桜は、いかにかあるらむ

巻8・1440首

雉鳴く、高円の辺に、桜花、散りて流らふ、見む人もがも

巻10・1866首

1440首は春の雨によって桜がどうなるか歌い、1866首は雉が鳴く高円山に散る桜を見る人がいるといいのにと歌い、両首は散る桜への憂いを詠む。

続いて、829首、1854首（梅と桜）又は3305首、3309首（つつじ花と桜）にみえる通り、桜を春の他の花を合わせて、春の美的な景色を描写する歌も記録されている。

梅の花、咲きて散りなば、桜花、継ぎて咲くべく、なりにてあらずや

巻5・829首

鶯の、木伝ふ梅の、うつろへば、桜の花の、時かたまけぬ

巻10・1854首

上記の両首には「散り始める梅の花は桜花が間もなく咲くのを告げる」という梅と桜の繋がりを歌われ、日本の春の絶景を描写される。

桜歌の41首の中に咲く桜を歌うのが15首であり、散る桜を歌うのも15首である。そして、1749の長歌と3129首に描写されるように、咲いてから散る桜或いは咲く桜と散る桜を同時に歌う歌もある。

白雲の、龍田の山を、夕暮れに、うち越え行けば、瀧の上の、桜の花は、咲きたるは、散り過ぎにけり、ふふめるは、咲き継ぎぬべし、こちごちの、花の盛りに、あらずとも、君がみ行きは、今にしあるべし

巻9・1749首

桜花、咲きかも散ると、見るまでに、誰れかもここに、見えて散り行く 巻12・3129首

1749の長歌には、夕暮れ時に龍田の山に咲いた桜は散ってしまったが、未だつぼみが咲くが、咲いたらまた散るので、あなたが残っている咲く桜を見に来るのがいいでしょうと歌われる。3129首は、柿本人麻呂歌集の旅の連作から採られている。ここには、桜が咲いてすぐに散る大変短い時期に恋しい人を思い出し、咲いて間もなく散る桜の様子に見えて消える恋しいの様子を喩えることが詠まれる。又は、咲いてすぐに散る桜に行き過ぎる旅人の様子を喩えるという解釈もある。

先述の桜歌をみると、当時の歌人は歌の中に、咲いてすぐ散る桜の性質を生かして感情が表現できることが分かる。つまり、桜花にみえる無常観を鑑賞することを通して喜び、恋人への恋しさ、憂えなどの強い感情が描写である。

『万葉集』の「桜児」:

巻16には、桜児説話が記録されている。昔、ある美しい娘が二人の男に愛されたが、二人の男は娘の愛を得るために争っていた。娘はその争いを悲しみ、争いを終わらせるために、自分が死ぬしかないと考えて、自殺することを決めた。娘は森に入って、木に掛かって縊れ死んだ。彼女を亡くした二人の男は苦痛に耐え、血の涙を流しながら以下の嘆き歌を歌った。

春さらば、かざしにせむと、我が思ひし、桜の花は、散りにけるかも 巻16・3786首

妹が名に、懸けたる桜、花咲かば、常にや恋ひむ、いや年のはに

巻16・3787首

3786首は春になると髪飾りにしようと思った桜が散るという意味をするが、ここには髪飾りとしようと思う桜が妻にしようと思った桜児の比喩であり、散る桜と同様に桜児が亡くなったことを悲嘆に暮れる男が詠む。3787首には、他の男は、桜児が桜花に因んだため、毎年桜が咲けば桜児を思い出し続けることを歌う。

2-2. 平安時代(794～1185年):

前述のように、中国で漢詩でよく詠まれていた梅は、日本への中華文明の渡来に伴い、日本にもたらされ、8世紀から漢詩に歌われるようになった。それで、奈良時代の貴族・知識人の間で梅の人気が高くて、当時の『万葉集』などの作品の中に「花」と言えば「梅」を指していることが無視できない。一方、平安時代に入ると梅から桜への転換が平安時代の文学作品に明確に見える。894頃に遣唐使が停止されたことにより、日本独自文化或いは国風文化が発達することになったとされる。それに従って、中国から渡来した梅から日本の山桜への人気逆転は平安時代に編纂された両方の和歌集と散文に見える。その証拠として奈良時代に編集された『万葉集』と平安時代の和歌集の代表とみなされる『古今集』における梅歌と桜歌の割合が取り上げられる。4500首以上含む『万葉集』における梅歌が2.6%を占めるが、桜歌が1%弱である。。それに対し、1111首を含む『古今集』で桜歌が6.3%を超えるが、梅歌が1.6%に過ぎない。次に平安時代に編纂された文学作品における桜像を考察する。

2-2-1.『伊勢物語』の桜:

平安時代に成立した短編歌物語集である『伊勢物語』は『竹取物語』に次く日本の歌物語の最古の作品とされる。『伊勢物語』の全125段の中で、桜歌と桜の物語を含むのは「第17、50、62、82、90、97、98段」の7段がある。

<u>『伊勢物語』の花見:</u>

『伊勢物語』の第82段では、花見の景色を語る話が記録される上にその景色を描写する桜歌もある。

「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」

「散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき」

この2首は違う視点から詠まれた桜歌である。1首は、桜がこの世界からなくなると桜がいつ咲くか散るか心配せず心が落ち着くこと

で春が楽しめることを歌うのに対し、2首は桜が散るからこそ美しくてこの世界に桜がいつまでもあってほしいと歌う。

加えて、上述の「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」は『古今和歌集』の巻第一　春歌上の53首にも在原業平の歌として採録されている。元々、『伊勢物語』は平安時代初期に実在した在原業平という貴族・歌人の生活・貴族女性との様々な恋愛関係・友達との冒険に基づいて創られた物語と思われる。『伊勢物語』にある在原業平の歌の中から30首が『古今和歌集』にも採録されているが、それについて『古今和歌集』の部分で詳細に検討する。「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」を在原業平が詠んだ歌として分析すれば、「春の心」が「人或いは在原業平の心」の比喩と解釈できる。在原業平は桜に女性を見出し、彼の一時的な恋愛関係は咲いてすぐ散る桜の短い命と同じように心を落ち着かせない。

『伊勢物語』に記録されている桜の物語と桜歌は同時における貴族の花見の景色を描写するが、『日本書紀』の巻12の「履中紀」に記録された花見の景色に似ている。『日本書紀』と『伊勢物語』の両作品に描かれた花見のシーンを分析すると、当時の桜或いは花見は貴族に限られていたことと、当時の花見は桜を楽しめることよりお酒を飲みながら、友達と遊び、和歌を詠む宴会であったことが明らかになるのではないであろうか。

『伊勢物語』の桜悲話：

『伊勢物語』の第62段に次のような哀しい物語が書かれており、その話の中に桜歌も歌われる。

「　いにしへのにほひはいづら桜花こけるからともなりにけるかな」

この歌には男は女に「あなたの美しさはどこにいったのか、昔女が匂う桜のように美しくて若くていたあなたがが、今は枯れた桜木のように変わったという悲しいことを歌った。一目で、この歌に描かれた女と桜を結び付く桜像は伝統的な桜像のように見えるが、実はこの桜像が綺麗なイメージから離れ、女の年が桜の花びらのように散ってしまい、枯桜のように面が変わったという悲劇的なイマージとして描かれたに違いない。

続いて、『伊勢物語』の中に「散る桜」を詠む歌は上述の歌に限らず、第97段に藤原基経の40歳の賀で披露される歌もある。

「桜花散りかひ曇れ老いらくの 来むといふなる道まがふがに」

この歌も『古今和歌集』で在原業平の歌として記録される。在原業平は、「老い」と「桜」が擬人化し、近づく「老い」が来る道がわからなくなるように、「桜」に咲き乱れてと頼む。これに関して更に『古今和歌集』の部分に述べる。

2-2-2.『古今和歌集』の桜:

平安中期（905年頃）に編纂された勅撰和歌集の最初の作品として取り上げられる『古今和歌集』-略称を『古今集』-における桜歌を検討するのに、最初にその歌を、巻春上・下の歌と春季節以外の歌という二つのグループに分ける必要がある。次に両グループに登場する桜歌を抽出し、その特徴を考察する。

最初に、『古今集』の春上と春下における桜歌を考察していく。前述のように、奈良時代に上層階級の間で大陸渡来の花として梅は桜より人気があったため『万葉集』における梅歌が桜歌を超える。しかし、平安時代に入るとそれが変わり、『古今集』における桜歌は梅歌の3倍近くになると言える。『古今集』の桜歌に関して次に詳細に述べる。

68首を含む巻1：春上には、その68首の中から桜を詠んだ歌は20首あり、66首を含む巻2：春下には桜歌は21首あり、両巻の桜歌を総計すると41首になるが、その歌では「さくら」という語が歌の詞書や歌詞に記録された。それに対し。巻2：春下の90首から118首まで「さくら」の代わりに「はな」が書かれているが、その「はな」が桜を指していると考えられるが、桜歌数に入れない。

一方、春上・下の以外の桜歌は以下の表の通りである。

巻名	首番
巻3：夏	136首
巻7：賀	349首、351首、358首
巻8：離別	393首、394首、395首、403首
巻10：物名	427首
巻11：愛1	479首
巻12：愛2	588首、590首
巻14：愛4	684首
巻16：哀傷	832首、850首

上述の表の歌は、歌詞が「さくら」、「さくらはな」、「はなみ」などの言葉を含むため桜歌として取り上げられるが、その以外、巻12の589首と巻13の675首には「はな」が記録されるが桜歌として議論される。

春上・下の歌とその以外の桜歌を明確した後、次のその歌の特徴を考察し、分析する。最初に指摘すべきのが、『古今集』の桜歌には咲く桜と散る桜を詠む歌が両方あるが、散る桜歌は咲く桜歌を超え、特に巻2にある桜歌である。巻2に登場する桜歌は殆ど散る桜を詠み、「さくらさく」という表現を含む73首さえ桜が咲いてすぐに散ると歌う。

空蝉の世にもにたるか花さくらさくと見しまにかつちりにけり　巻1・73首

そして、注目引くのが巻1：春上における桜には両方の咲く桜と散る桜の歌があるが、折る桜を詠む歌もあるということである。54首、55首、58首、64首、65首、80首は「折る」を読み込んだ歌である

いしはしるたきなくもかな桜花たをりてもこむ見ぬ人のため　巻1・54首

見てのみや人にかたらむさくら花てことにをりていへつとにせむ　巻1・55首

ちりぬれはこふれとしるしなきものをけふこそさくらをらはをりてめ　巻1・64首

をりとらはをしけにもあるか桜花いさやとかりてちるまては見む　巻1・65首

54首と55首に見えるように、桜が咲く所に来て見られない人のためにお土産として桜枝を折られたことを歌がある。又は、64首のように桜が散った後いくら恋しく思っても桜の花が見えないため、今のうちに桜を折ると詠む歌もある。65首は　折るのが惜しく思われるので散るまで泊まって見ていくことを詠む。

更に、『万葉集』に歌われた桜と同様に『古今集』の桜の多くは山桜であるが、その例外は以下のかにわざくらを詠む紀貫之の首が取り上げられる。

かつけとも浪のなかにはさくられて風吹くことにうきしつむたま
巻10・427首

続いて、桜が様々な美的観点から詠まれたことは『古今集』の桜歌の特徴の一つと考える。

- 春霞と桜：

春霞に隠される・囲まれる・こめる山桜を詠む歌は以下の通りである。

やまさくらわか見にくれは春霞峰にもをにもたちかくしつつ　巻1・51首

たれしかもとめてをりつる春霞たちかくすらむ山のさくらを　巻1・58首

春霞たなひく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく　巻2・69首

春霞なにかくすらむ桜花ちるまをたにも見るへきものを　巻2・79首

山さくら霞のまよりほのかにも見てし人こそこひしかりけれ　巻11・479首

春霞たなひく山のさくら花見れともあかぬ君にもあるかな巻14・684首

又は91首、94首、102首と103首にも春霞に隠される桜が描写される。

- 心と桜：

53首、61首、82首、83首、84首、85首、87首、96首、104首、358首、589首と832首にみえるように、「心」を桜と共に歌う歌も見つかるが、その歌の中に、桜の心、人の心、春の心などの組み合わせが様々ある。

世中にたえてさくらのなかりせは春の心はのとけからまし 巻1・53首

上の歌、「世界に桜がいなかったら、いつ咲くか、いつ散るか、春の心が悩まずに、落ち着く」と解釈するとここの春を擬人化されたとして取り上げるが、ここの「春の心」を「春を過ごす人の心」という解釈もある。

久方のひかりのとけき春の日にしつ心なく花のちるらむ 巻2・84首

この歌には、「しつ心」に桜の擬人化をみ、心が落ち着かない桜の花がはらはらと散ることを詠む。この歌は『百人一首』にも桜歌として登場する。「心」桜を擬人化し、「心」と共に歌うのが84首に限らず、藤原基経が亡くなった時詠まれた832首（巻16：哀傷）に桜が心があったら、今年ばかり墨染めの色でに咲けることを詠む。

ふかくさののへの桜し心あらはことしはかりはすみそめにさけ 巻16・832首

- 雪と桜：

以下の歌で詠まれたように散る桜を雪に喩えた歌もある。

み吉野の山へにさけるさくら花雪かとのみそあやまたれける

巻1・60首

けふこすはあすは雪とそふりなましきえすはありとも花と見ましや

巻1・63首

桜ちる花の所は春なから雪そふりつつきえかてにする

巻2・75首

雪とのみふるたにあるをさくら花いかにちれとか風の吹くらむ

巻2・86首

60首では、深い雨の所として知られている吉野山に咲く桜を雪と見間違えたことを詠まれる。63首は、今日来なかったら、桜の花が降る雪のように散るが、とける雪と違って散った花が土地の上に残るでしょうと意味をする。75首にも、桜が散る場所は春なのに、雪が降るが消えづらいと詠まれるが、ここにも63首と同様に桜が雪に見立てて歌われた。86首には、「雪が静かに降るように桜も散るのが残念だが、桜にいくら散れと言っても、風が吹くでしょう」と歌人が詠むが、ここに歌人はコントロールできない気持ち或いは手が出せない気持ちを表す。

- 涙と桜：

春雨のふるは涙かさくら花ちるををしまぬ人しなけれは 巻1・88首

88首は散る桜を悲しむ人が泣きその人の涙に春雨を喩える歌である。

- 浪と桜：

さくら花ちりぬる風のなこりには水なきそらに浪そたちける

巻2・89首

かつけとも浪のなかにはさくられて風吹くことにうきしつむたま

巻10・427首

浪を桜の花と共に読む歌は紀貫之が詠まれた上述の二つの歌である。89首では、紀貫之が散った桜の花びらが風によって海の波のように空に動いていることを詠む。つまり、紀貫之が空を梅に、桜の花びらを波に喩える景色を詠む。427首は、物名の歌であり、「なみ

のなかにはさくられ」に山桜の一種蒲桜のことと呼ばれる「かにわざくら」を詠む歌として解釈される。ここに焦点をあてるのが両首には吹く「風」が主なアスペクトになるということである。

- 風と桜：

前述の86首と427首に描写されたように吹く風が桜が散る主な原因として取り上げられるが、風を桜と詠みこんだ歌はその二つの歌に限らず、76首、85首、86首、87首、89首、91首、103首、394首と427首にも詩人が自然的現象である風を歌に生かして散る桜を歌った。

花ちらす風のやとりはたれかしる我にをしへよ行きてうらみむ

巻2・76首

春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふと見む

巻2・85首

雪とのみふるたにあるをさくら花いかにちれとか風の吹くらむ

巻2・86首

山たかみみつつわかこしさくら花風は心にまかすへらなり

巻2・87首

花の色はかすみにこめて見せすともかをたにぬすめ春の山かせ

巻2・91首

山かせにさくらふきまきみたれなむ花のまきれにたちとまるへく

巻8・394首

かつけとも浪のなかにはさくられて風吹くことにうきしつむたま

巻10・427首

上述の五つの歌には風の擬人化がみえる。76首では詩人が、桜花を散らす風がいる所誰かが知っていれば私に教え、そこに行って風に恨み言を言うことを詠む。85首は詩人が桜花が自分自体で散るかどうか確認するため、風に咲く桜の近くを避けて吹いてと頼む。86首を前述の「雪と桜」の部分に説明した。87首では、山が高くて、行きたいと思っても行けないので遠くから桜を眺めるしかないけど

、風は思うまま桜の花を散らしていることを詠まれる。91首では、歌人が霞に隠れた美しい桜の花が見えないので、風にせめて香りだけでも盗み出してくれないかと歌う。394首は次に述べる「散る桜の擬人化」に説明し、427首は前述の「浪と桜」に分析された。

上述の歌を分析すると、風と桜の関係が対立的な関係でなく、動的関係である。風が吹き、桜が散るという光景を見る・想像すると詩人が感動し、和歌を作成する。それで、風が散る桜の歌に不可欠な要素である。

- 散る桜の擬人化：

その上に、散る桜を擬人化し、桜に散って欲しいと頼むことは349首と403首にみえる。

さくら花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まかふかに

巻7・349首

『伊勢物語』の部分に述べたように、349首が『伊勢物語』題97段「40の賀」にも収録される。その歌は堀川の大臣という人の四十歳の祝いを九条にある家で催された、『古今集』では在原業平の歌として記録される。在原業平は、人に喩えた老いが来る道が分からなくなるために桜の花と話して散って欲しいと頼む。

しひて行く人をととめむ桜花いつれを道と迷ふまてちれ 巻8・403首

この歌にも、歌人が、別れる人が止めたいため、その人が道が分からなくなるまで桜の花に散り乱れてくれと頼む。この歌の内容は394首とほぼ同じである。

山かせにさくらふきまきみたれなむ花のまきれにたちとまるへく

巻8・394首

394首は「君が留まって欲しくて、君が帰る道が分からないため桜が嵐のように散り乱れて欲しいという歌である。それに加えて、桜の散り乱れによって道に迷うことは、「この里で泊まるかなあ、桜が散り乱れに迷って家までの道路が忘れたこと」を歌う72首と「野

辺へ若菜を摘むのに来たが、散り乱れる花で道に迷う」と歌う116首にも見える。

このさとにたひねしぬへしさくら花ちりのまかひにいへちわすれて

巻2・72首

春ののにわかなつまむとこしものをちりかふ花にみちはまとひぬ

巻2・116首

- 花見の歌:

わかやとの花見かてらにくる人はちりなむのちそこひしかるへき

巻1・67首

いたつらにすくす月日はおもほえて花見てくらす春そすくなき

巻・351首

67首は咲いた桜を見に来た人に送った歌であり、ここでは歌人が我が家の桜を見に来た人が、桜が散る後来なくて、恋しくなることを詠む。351歌では歌人がただ無駄に過ぎる月日が何ともなくが、花見を見て暮らす春あ少ないでしょう詠む。

2-2-3.『源氏物語』の桜:

前に述べられたように、『日本書紀』、『伊勢物語』、『万葉集』に登場する桜は男性角度から讃美されたが、平安時代中期に紫式部によって作成された『源氏物語』（1008年）における桜は女性視点から自覚され、憧憬された。

同物語を読むと、表面的に源氏と多くの女性との恋愛関係が物語の軸となっていると見えるが、深刻に考えると、本質的に物語の主な概念が、主人公の日常生活における人生の一時性と恋の脆弱性を巡っていることが明確に見えるのではないであろうか。それは、日本の仏教哲学に基づく「物の哀れ」という概念に深く関連する。それで、日本の文化において「物の哀れ」の象徴としてみなされる桜が『源氏物語』にも化身される。物語に描写される桜の開花の他に、紫式部は主人公である源氏をめぐる多くの女性たちの中から桜に喩えたのは、紫の上という源氏の最愛の妻だけであった。

『源氏物語』の「桜宴」

『源氏物語』の「桜宴」の冒頭に南殿すなわち紫震殿の前にある桜の開花と共に行われる桜宴の景色は以下の通り提示されている。

「如月の二十日あまり、 南殿の桜の宴せさせたまふ。后、春宮の御局、左右にして、参う上りたまふ。弘徽殿の女御、中宮のかくておはするを、をりふしごとにやすからず思せど、物見にはえ過ぐしたまはで、参りたまふ。」

上述の華麗な光景は、前の『日本書紀』巻12の「履中紀」と『伊勢物語』の第82段に記録される貴族によって行われていた花見の景色の継続とみなされる。それについて、は次のように論じる。**「摂関時代の文化は『源氏物語』という作り物語に集大成されたのだが、当然、この物語には貴族の文化としての桜が重要なファクターとなっていなければならない」**

2-2-4.『枕草子』の桜:

平安時代中期の1001年ごろに完成した『枕草子』は一条天皇の中宮定子に仕えた女房・清少納言によって執筆され、宮廷における日常生活や四季の自然などに関わる話を含む。 『枕草子』に桜という語が27例現れるが、それは全部桜の花と桜木を表せず、当時の貴族が着ていた桜襲の衣装を示す例も登場し、両方の例が当時の宮廷生活の栄華を演出する。

「木の花は濃きも薄きも紅梅。桜の花びらおほきに、葉色こきが、枝ほそくて咲きたる。藤の花、しなひ長く色よく咲きたる、いとめでたし。」「おもしろく咲きたる桜を長く折りて、大なる花瓶にさしたるこそをかしけれ。」「高欄のもとに、青き瓶の大なる据ゑて、桜のいみじくおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、高欄のもとまでこぼれ咲きたるに・・・」

『枕草子』から抽出された上述の文章を読むと、 『枕草子』で仲関自家の栄華と深刻に繋がる桜像の目立つ特徴が、いつも満開に咲いており、決して散らない花として描かれたことが明確にみえる。そして、桜花が誰かに盗まれたかという面白い話は**「御前の櫻、色はまさらで、日などにあたりて萎みわるうなるだにわびしきに、**

雨の夜降りたる翌朝、いみじうむとくなり。.... よき人ならばいはまほしけれど、 『かの花盗む人は誰ぞ、あしかンめり』といへば、笑ひて、いとど逃げて引きもていぬ。」に述べられている。ここには、、桜が中宮定子の象徴として用いられており、中宮定子が枯れた桜の綺麗ではない景色を見ないために、宮殿の使用人が枯れた桜を全部抜き取り、消えた桜花に驚いた中宮定子に夜桜が人に盗まれたと言い伝われが、中宮定子がそれに笑い、雨のせいにした。

更に、『枕草子』における「散る桜」の雄一の例は次の文章、**「さて、その二十日あまりに、中納言、法師になりたまひにしこそ、あはれなりしか。桜など散りぬるも、なほ世の常なりや。「置くを待つ間の」とだに言ふべくもあらぬ御有様にそこ見えたまひしか。」**に見つかるが、ここに、清少納言は当時の権力者が堕落することを桜が散ることに喩え、すなわち、清少納言は散る桜に世界の無常観を見、ここの桜が実際に散らず、比喩的な表現に限られる。その雄一の例は、清少納言が『枕草子』において散る桜を描写しない理由が、仲関自家の贅沢な宮廷生活の要素として取り上げられた桜が散ることが仲関自家の堕落の比喩として解釈される可能性があるからではないであろ。

最後に、 『枕草子』で清少納言が**「絵にかきおとりするもの なでしこ。菖蒲。桜。物語にめでたしといひたる男・女のかたち。」**に桜を書き込んだことによって、当時に桜は絵に描かれるようになったことが明らかになる。しかし、清少納言が**「いやしげなるもの 式部丞の爵。黒き髪のすぢふとき。布屏風の新しき。舊り黒 みたるは、さるいふかひなき物にて、なかく何とも見えず。新しくしたてて、 櫻の花多くさかせて、胡粉、朱砂など色どりたる繪書きたる。」**と述べることから、清少納言が絵に描かれた桜が嫌いなことは想像できる。それは、桜をいくら完璧に絵に描いても、実際に見える桜の美しさには勝てず、本物の桜を見ると絵の桜は見劣りするからではないであろうか。

2-2-5.『百人一首』の桜:

小倉百人一首は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活動した公家・藤原定家が選んだ秀歌撰である。『百人一首』における桜を詠む歌を以下の通りであるが、ここに焦点を当てるのが、以下の歌

の中に『古今集』や『新勅撰集』などの他の作品にも登場する歌があることである。

9　花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに　　歌人：小野小町
33　久方の光のどけき春の日にしづこころなく花の散るらむ
歌人：紀友則
61　いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな
歌人：伊勢大輔
66　もろともにあはれとも思へ山桜花よりほかに知る人もなし
歌人：前大僧正行尊
73　高砂の尾上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ
歌人：前中納言匡房
96　花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものはわが身なりけり
歌人：入道前太政大臣

上記の9首は『古今集』巻下（113首）で小野小町の歌として、33首は『古今集』春下（84首）で紀友則の歌として、66首は『金葉集』雑上（521首）で前大僧正行尊の歌として、96首は『新勅撰集』雑一（1052）で入道前太政大臣の歌として記録されている。

上述の歌に描写された桜は当時の美しい桜像と異ならない。そして、その歌の中では「桜」の代わりに「花」と書かれていることに気付くが、ここの「花」が桜の花を指摘するとみなされる。実は、『百人一首』においては、「花」と詠まれるのが５首（9・33・35・66・96）であり、その中に35首だけ「梅」を歌い、他の四つの首は「桜」を歌う。この35首は、『古今和歌集』の巻2・42首として記録されている。それも平安時代における梅から桜への逆転の証拠として取り上げるのではないであろうか。

35　人はいさ　心も知らず　ふるさとは　花ぞ昔の　香ににほひける
歌人：紀貫之

2-3. 鎌倉・室町・安土桃山時代（1185～1600年）

鎌倉・室町・安土桃山時代は戦争時代であり、鎌倉幕府の初代征夷大将軍である源頼朝から江戸に幕府を開いた徳川家康まで、武士が政治と経済の実権を掘る時代として、日本全国が戦争の混乱に陥っていた。従って、長い間相次ぐ戦乱が当時の人々と文学に大きな影響を与えることは不思議ではないであろうか。それで、平家の栄華の没落と武士階級の台頭を描写する『平家物語』のような軍記物語が現れた。

そして、このような不安定な世界に生活する人々の心に「この世界が一時的であり、儚い世界」と表す仏教の「無常観」が根付き、当時に心の支えを願う人々の間に仏教が広く浸透した上に、「無常観」を色濃く描く『方丈記』と、兼好法師によって書かれた『徒然草』という随筆が現れた。

2-3-1.『新古今和歌集』の桜:

政治の中心が貴族から武士へと変わり始める鎌倉時代初期に編纂された『新古今和歌集』（1205年）は『古今和歌集』から数えて８番目の勅撰和歌集であるが、『万葉集』や『古今和歌集』と並び、日本を代表する歌集の一つとみなされる。『新古今和歌集』の構成は『古今和歌集』の構成と同じように20巻を含み、四季の歌の巻で始まりが、1111首を含む『古今和歌集』に対し、『新古今和歌集』の歌は2000首に至る。

『古今集』と『新古今集』に描写された桜歌を比較すると、次の両歌集の間の類似点が明確に分かる。『新古今集』の桜歌では『古今集』にみた「霞に囲まれる桜」、「心と桜」、「雪と桜」などの組み合わせを歌われる上に、散る桜を詠む歌が咲く桜を詠む歌を超える。そして、両作品には「さくら」という語が歌の詞書や歌詞に記録された歌の以外に「さくら」の代わりに「はな」が書かれているが、その「はな」が桜を指していると考えられる歌もある。更に、『古今集』と同じように、『新古今集』の中に桜歌の大多数が巻1・春上と巻2・春下に乗せられている。しかし、桜歌に関して両歌集の間の著しい相違点としては、四季歌以外の桜歌の配分である。例えば、『古今集』の愛巻の中に桜歌は4首であるが、『新古今集』の愛巻の中に桜歌は1首に過ぎない。又は、前述のように、『古今集』において春上・下の以外の桜歌は他の賀、離別、物名、恋、哀傷の

巻に乗せられているが、『新古今集』における四季以外の桜歌の大部分は巻16・雑上と巻17・雑中にある。

吉野山の桜:

『新古今和歌集』は『古今和歌集』と同様に、山に咲く桜を詠む歌が多いが、『新古今和歌集』に歌われた桜歌に目立つのは「吉野山」の桜歌が数多いことである。その上、ある歌に「吉野山」という語の前に「み」という字が添付され「みよしの」になり、みよしのを漢字で書けば「美吉野」になる。「美吉野」は、臨済宗大徳寺派の僧である一休宗純が歌った**「花は桜木、人は武士、柱は桧、魚は鯛、小袖　はもみじ、花はみよしの」**にも見えるが、それについて「江戸時代の桜」の部分に詳しく説明する。以下には『新古今集』における吉野山の桜歌の例を載せる。

吉野山桜かえたに雪ちりて花おそけなる年にも有るかな 巻1・79首

吉野山こぞの枝折りの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ　巻1・86首

吉野山花やさかりににほふらむ古里さえぬ峰の白雪　巻1・92首

み吉野の高嶺の桜散りにけり嵐も白き春のあけぼの　巻2・133首

最後に無視できないのは、吉野山の桜を詠む歌は『古今集』にも載っている。

み吉野の山へにさけるさくら花雪かとのみそあやまたれける巻1・60首

こえぬまはよしのの山のさくら花人つてにのみききわたるかな巻12・588首

2-3-2.『平家物語』の桜:

平安末期から鎌倉初期にかけての源平争乱を描いた軍記物語である『平家物語』は鎌倉時代に成立したとみなされるが、作者が不詳である。『平家物語』に歌われる桜が7巻「忠度都落」と9巻「忠度最期」に乗せられた歌にみえる。両巻には、平安時代の平家一門の

武将である平忠度に関わる物語が乗せられており、彼の名が両巻の題名に書かれている

7巻　　さざなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山桜かな

上記の7巻の歌では、現在の滋賀県大津市に置かれた日本の第38代天皇である天智天皇の志賀の都が荒れていたが、昔と同様に長等山の山桜だけ美しく咲いていることが詠まれており、ここには荒れた都と満開である桜の間の対照は、儚い人工物と永遠なる自然の美しさの間の対立を対象する。

この歌は平忠度が詠んだ歌とみされる。平忠度は武将以外に歌人として有名であり、『勅撰和歌』を編纂していた藤原俊成に歌を師事していた。平忠度は自分の和歌を勅撰和歌に採用されることを夢見をみていたが、この願いを藤原俊成に伝えた。ついに、この歌は勅撰和歌の第7番目に当たる『千載和歌集』の巻第一・春歌上 ・66には入集してが、平家が天皇の咎めを受けたため、藤原俊成が平忠度の名前を出すことができなく、この歌が「詠み知らず」として載る。その上、動歌は平忠度の『平忠集』にも載っている。

9巻　行き暮れて　木の下陰を　宿とせば　花やこよひの　主ならまし

この歌も平忠度が詠んだ歌であり、平忠度の死を語る9巻『忠度最期』に載っている。平忠度はこの歌で、桜を擬人化し、歩いて行くうちに日が暮れて桜の木の下で野宿をするならば、桜の花が宿の主になり、悔しさを　慰めてくれると歌う。『忠度最期』で同歌が平忠度の箙に付けられたふみに書かれており、「忠度」と名が記されていたと語られる。それで、平忠度を討ち取った岡部六弥太は討ったのが忠度だと分ったとき、平忠度の死を大声で宣告した。忠度が討たれたことを知った者は涙を流し、敵も味方も武芸にも歌道にも優れていた平忠度の死を惜しんだ話が載っている。

同歌は9巻の『忠度最期』で平忠度が打ち取られたシーンの直後に載っていることは、象徴的な意味合いがあるのではないであろう。一ノ谷の戦いで勇敢に死んだ平忠度と桜の関係には戦乱時代の結果として生まれた武士と桜の結びが見えるのであろう。

2-3-3.『徒然草』の桜:

前述のように、平安時代にあった桜ブーム到来に従って「桜」の花見が貴族の間に広がっていた。しかし、それが鎌倉時代以降徐々に変わっていき、貴族に限られていた花見が、武士と一般層にも広がりつつあるようであった。その根拠としては『徒然草』に登場する桜の話が取り上げられる。それに関して次に詳細に述べる。

鎌倉時代末期に纏められたとされる『徒然草』は、吉田兼好によって書かれた随筆であり、清少納言の『枕草子』、鴨長明の『方丈記』と共に日本三大随筆の一つと評価される。ここに指摘すべきなのは、前述の他の文学作品と同様に、243段を含む『徒然草』に記録される桜を関わる話の中には「桜」という語の代わりに「花」という語が書かれており、その「花」は「桜」を指すとみなされるときがある。

19段に**「鳥の声などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、墻根の草萌え出づるころより、やゝ春ふかく、霞みわたりて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ、折しも、雨・風うちつづきて、心あわたゝしく散り過ぎぬ、青葉になりゆくまで、万に、ただ、心をのみぞ悩ます。」**と記述されるが、ここに吉田兼好は、春が深くなると、霞がかかるようになり、桜の花が咲くが、春の雨と風によって満開の桜がすぐ散るということについて話しているが、ここに吉田兼好が描写する春のイメージは、前述の『古今集』にみた「桜」、「雨」、「霞」などの日本における春の要素を組み合わせるイメージと似ているのではないであろう。

137段に**「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは。雨に対ひて月を恋ひ、垂れこめて春の行衛知らぬも、なほ、あはれに情深し。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などこそ、見所多けれ。歌の詞書にも、『花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ』とも、『障る事ありてまからで』なども書けるは、『花を見て』と言へるに劣れる事かは。花の散り、月の傾くを慕ふ習ひはさる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、『この枝、かの枝散りにけり。今は見所なし』などは言ふめる。…. すべて、月・花をば、さのみ目にて**

見るものかは。」と記録されるが、ここに吉田兼好は「桜」と「月」を取り上げ、「未完の美」について論じる。吉田兼好は、桜が満開のときしか、月が満月のときしか鑑賞できないことを否定する。桜の美が満開に限らず、桜が咲かせる直前と散って空で飛び、地面に広がる景色も美しく、散る桜を歌う歌が多くある。

更に、137段で吉田兼好は貴族の花見と上京したばかりの田舎者の花見を比較する。**「すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまも等閑なり。片田舎の人こそ、色こく、万はもて興ずれ。花の本には、ねぢより、立ち寄り、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、果は、大きなる枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さし浸して、雪には下り立ちて跡つけなど、万の物、よそながら見ることなし。**」吉田兼好によると、貴族が桜を上品に楽しむのに対し、田舎者が桜の木の下で酒を飲み、歌を歌い、大きな桜の枝を心なく折るという騒ぎのような振舞いをするという。

139段に吉田兼好は**「家にありたき木は、松・桜。松は、五葉もよし。花は、一重なる、よし。八重桜は、奈良の都にのみありけるを、この比ぞ、世に多く成り侍るなる。吉野の花、左近の桜、皆、一重にてこそあれ。八重桜は異様のものなり。いとこちたく、ねぢけたり。植ゑずともありなん。遅桜、またすさまじ。虫の附きたるもむつかし。**」と述べ、ここに、家に植えたらいい木としての松と桜に関して話し、一重桜と奈良の八重桜について述べ、八重桜へのこだわりを表した後、遅く咲く桜が好きではない理由も説明した。それが遅桜が咲く時期にずれる上に、虫が付くからである。

161段に**「花の盛りは、冬至より百五十日とも、時正の後、七日とも言へど、立春より七十五日、大様違はず。**」と書かれており、ここの「花」も桜を指している。ここに吉田兼好は桜の満開日の基準について述べ、それが冬至から150日後、春分の日から7日、立春から75日である。

上述に抜粋した文章とその説明をみると、吉田兼好の『徒然草』における桜像は、前述の和歌集に描写された美的な桜像と異なり、当時の桜に関わる事実に限られているが、その事実が分かれば、桜

が当時の貴族と田舎者或いは当時の社会にとってどんな花であったか想像できるのではないであろう。

2-4. 江戸時代:(1603～1868年):

江戸時代には桜がどのような花であったか考察すると、江戸時代において桜像が大幅に変化したことが明確に分かる。前に指摘したように、貴族階級に限られていた花見が平安時代以降武士階級に広がってきたが、江戸時代になってもの寛永寺や上野寛永寺のような有名な花見の場所に一般庶民が立ち入ることができなかった。初めて庶民が花見ができる場所を作ったのは、8代将軍徳川吉宗公である。その上、江戸時代は、現在日本で咲く桜の種類の約70～80%を占める染井吉野が誕生した時代である。次には、江戸時代における桜像の特徴に関して示す。

「花は桜木、人は武士」:

「花は桜木、人は武士」とは、花の中に桜が最も優れており、人の中に潔い武士が第一だということを意味する。「花は桜木、人は武士」という台詞は、江戸中期に赤穂浪士のあだ討ち事件を題材とした『仮名手本忠臣蔵』に現れた上で、桜像を大転換させたと言える。しかし、この台詞の起源に関して考察すると、「花は桜木、人は武士」が初めて現れたのが、江戸時代でなく室町時代であることが分かる。

この文章は室町時代臨済宗大徳寺派の僧である一休宗純に由来する。全文は**「花は桜木、人は武士、柱は桧、魚は鯛、小袖　はもみじ、花はみよしの」**となっているが、ここの「みよしの・美吉野」も桜の名所であり、奈良の吉野町の桜を指すと考えられる。上述の『新古今集』に歌われた美吉野の山の桜の例も参考になるのではないであろうか。

前述に筆者が説明した通り、鎌倉・室町・安土桃山時代は戦争時代であったため、若く死ぬ人が多くいた。この文章には、咲いてからすぐ散ってしまう美しい桜と同様に、戦いで死ぬ武士も潔く美しいという桜に武士を喩える比喩が見える上に、武家が政権を握って

いた鎌倉時代から江戸時代末までの約680年という武家時代の背景或いは影響もこの文章に明確である。更に、咲いて間もなく散る美しい桜と戦いで潔く死ぬ人を結ぶ概念が江戸時代以降継続し、武士政権が終わった明治時代には桜が軍の花になった。

ソメイヨシノ
染井吉野の誕生:

日本の桜の中で染井吉野という桜の種類は、日本に咲く桜の約70～80%を占めるが、染井吉野が初めて現れてのは江戸時代の末期である。江戸時代の末期に、染井村（現在の豊島区駒込）の植木屋の職人が「大島桜」と「江戸彼岸桜」を交配して新たな雑種の桜花をつくった。染井吉野の命名は染井村と桜が有名な吉野山に由来する。染井吉野という命名が初めて使われたのは、1990年（明治33）に藤野寄命によって書かれた「日本園芸会雑誌」第92号においての論文「上野公園桜花ノ種類」の文中である。

「大島桜」と「江戸彼岸桜」の雑種が交雑して生まれた染井吉野は、花が大振りで香りのよい「大島桜」と、花が咲いたあとに葉が出てくる「江戸彼岸桜」の両方の桜花の特徴を取り入れ、つぼみが淡いピンク色で、開くと花はが白に近いピンク色になる。そして、接ぎ木で増やしていったクローンの栽培品種であるため成長スピードが速い染井吉野は、明治時代以降に人気が高まり、花見の用途で学校、公園などの様々な場所に植樹され、瞬く間に日本全国に広がっていく。

3.結論：

前述のように、桜が歴史上初めて登場するのが『古事記』と『日本書紀』であることが明らかになった。次の記録は『万葉集』であり、奈良時代に上層階級の間で大陸渡来の花として梅は桜より人気があったため『万葉集』における梅歌が桜歌を超える。そして、ここでは当時の文学に現れた「美女」と結び付けられた桜像は「桜」=「美」に限られていた。

一方、平安時代に入ると、『古今集』には、桜歌が梅歌の3倍近くなり、桜に喩えられた美女を歌う桜歌が見えるが、『古今集』に描写された桜像が『万葉集』の桜像と違っているといえる。なぜかと

いうと、『古今集』の桜歌をみると、その桜像が伝統的な桜像から少し離れ、「桜」と「死」の繋がりを表す歌が生まれたといえるからである。『古今集』では散る桜を詠む歌は咲く桜を詠む歌より多く収録されており、『古今集』巻第一春歌上の49番から68番までの20首は咲いた桜を詠んでいるのに対し、巻第二春歌下の69番から89番まで散る桜歌群があり、69番で「色かはりゆく」と散る気配を見せた後、ひたすら散る桜が詠まれていく。

一方、同時代に作成された『源氏物語』に描かれた桜像が遺族に繋がる伝統的な美しい桜像に過ぎなかった。そして、同時代にも成功された『枕草子』にある桜像は『古今集』にある桜像と比べると、『枕草子』は散らない桜を演出することに対し、『古今集』は散る桜を詠むという対照的な視点が明らかになる。『枕草子』においては、桜は后の象徴として用いられており、満開の大きな桜は、決して散らせてはいけないものだった。従って、『古今集』が散る桜をどんなに賞美しても、『枕草子』は散らない桜の世界を描きとめたのである。それに対し、鎌倉時代に編纂された『新古今和歌集』にある桜像が『古今和歌集』に描写された桜像と似ているが、『新古今和歌集』のほうが桜歌が多く、100首超える。

続いて、は戦争時代として取り上げられる鎌倉・室町・安土桃山時代における桜像は軍記物語や儚い世界と表す仏教の「無常観」などの概念と結び付けられるようになった。**「花は桜木、人は武士」**という台詞は桜像の変化に大きな役割が果たし、桜像を大転換させたのである。聖樹であり、美の極みであった桜は、伝統的な美しい桜像から離れ、咲いて間もなく散る美しい桜と戦いで潔く死ぬ人を結ぶ概念が生まれた。

前述の通り、本研究では、奈良時代（710年～794年）から江戸時代（1603年～ 1868年）にかけて日本古典文学において桜像がどのように変化してきたのか検討した上で、日本古典文学に描かれている桜像の象徴性の特徴とその変遷を明確にしたが、今後は、さらに明治時代をはじめ日本近現代文学における桜像を論じる研究が必要と考 えられる。

参考文献：

本：

- 小川和佑(1998年）ー『桜詞-その文化と時代』-株式会原書房ー21ページ。
- 水原紫苑（2014年）ー『桜は本当に美しいのか』-平凡社ライブラリーー25ページ。

研究：

- 曽根　博義(1978年)　近代文学におけ「桜」のイメ-ジ--萩原朔太郎と梶井基次郎を中心に、日本大学国文学会、語文 (45), p1-11。
- 重留 妙子（1980年）、万葉集における梅の歌考、熊本女子大学国文談話会、国文研究 (26), 6-14。
- 高木きよ子（1993年）、「桜と日本人の心性」、The University of Tokyo. Department of Religious Studies、東京大学宗教年報.別編10、3-4。
- 笠原 伸夫（1993年）、花かげの鬼--近代小説における桜のイメ-ジ (桜の詩学--反花鳥風月のすすめ<特集>)現代詩手帖 36(5), p32-38。
- 今村隆男（1999年）、「「憂鬱」(Melancholy)をめぐる比較文学の試み」、『和歌山大学教育学部紀要四十五号』。
- 立花 志（2002年）、「古今集の「桜」と小野小町」、別府大学国語国文学 (44)、25-39。
- 入谷　祐子（2004年）、「万葉集巻第十六由縁歌「桜児伝説」の研究―境界と供犠の視点から―」、奈良大学大学院研究年報（ 9）、5-10。
- 飯村 洋子（2005年）、「『新古今和歌集』桜歌群の配列をめぐって」、横浜国大国語研究、横浜国大国語研究 (23)、15-25。
- 河南 枝里（2009年）「『古今和歌集』における<桜>の見立て」、札幌国語研究、札幌国語研究 14。
- 白幡 洋三郎（2009年）、「花と緑から生まれた日本の文化」、プレック研究所、PREC Institute Inc,スタディレポートNo.14。
- 奥村英司（2012年）、『不可視の桜ー平安文学の想像力ー』-鶴見大学紀要. 第1部, 日本語・日本文学編（49 ）、21-33 。
- 大石　泰夫(2015年)、「民俗のサクラと万葉のサクラ」、國學院大學、國學院雑誌 116(1), 211-224.
- 金子 紀子、（2016年）「『『桜』歌の系譜：古今集から後拾遺集へ」、東京女子大学紀要論集 66(2)、133-161。

- 金子　紀子（2016年）、「和泉式部の「桜」の歌について」、東京女子大学紀要論集 67(1)、1-33。
- 赤間 恵都子（2017年）、「『古今和歌集』と『枕草子』―「桜」の描写の比較から―」、十文字学園女子大学紀要 = Bulletin of Jumonji University（47）、259-266。
- 梁青（2018年）、「九世紀末の桜花詩 ―和歌との交渉をめぐって―」、日本語・日本学研究第 8 号。
- 中嶋 真也(2018年) 和歌文学における「桜」 (パネルディスカッション「桜の記憶　:日本文学史の磁場として」、駒澤大学文学部国文学研究室、駒澤國文 (55), 133-139。

مجلة
بحوث الشرق الأوسط

مجلة علمية مُحَكَّمَة
(مُعتمدة) شهريًا

العدد الثالث والتسعون
(نوفمبر 2023)

السنة التاسعة والأربعون
تأسست عام 1974

الترقيم الدولي: (2536-9504)
الترقيم على الإنترنت: (2735-5233)

يصدرها
مركز بحوث
الشرق الأوسط

الأراء الواردة داخل المجلة تعبر عن وجهة نظر أصحابها وليست مسئولية مركز بحوث الشرق الأوسط والدراسات المستقبلية

رقم الإيداع بدار الكتب والوثائق القومية : ٢٤٣٣٠ / ٢٠١٦

الترقيم الدولي: (Issn :2536 - 9504)

الترقيم على الإنترنت: (Online Issn :2735 - 5233)

ISSN 2536-9504

مجلة بحوث الشرق الأوسط

مجلة علمية مُحكَّمة
متخصصة
في شؤون الشرق الأوسط

مجلة مُعتمَدة من بنك المعرفة المصري

موقع المجلة على بنك المعرفة المصري

www.mercj.journals.ekb.eg

- معتمدة من الكشاف العربي للاستشهادات المرجعية (ARCI) . المتوافقة مع قاعدة بيانات كلاريفيت Clarivate الفرنسية.
- معتمدة من مؤسسة أرسيف (ARCIf) للاستشهادات المرجعية للمجلات العلمية العربية ومعامل التأثير المتوافقة مع المعايير العالمية.
- تنشر الأعداد تباعًا على موقع دار المنظومة.

دار المنظومة
DAR ALMANDUMAH
الرواد في قواعد المعلومات العربية

العدد الثالث والتسعون - نوفمبر ٢٠٢٣

تصدر شهريًّا

السنة التاسعة والأربعون - تأسست عام 1974

المطبعة
مطبعة جامعة عين شمس
Ain Shams University Press

مجلة بحوث الشرق الأوسط

(مجلة مُعتمدة) دوريَّة علميَّة مُحكَّمَة

(اثنا عشر عددًا سنويًّا)

يصدرها مركز بحوث الشرق الأوسط والدراسات المستقبلية - جامعة عين شمس

AIN SHAMS UNIVERSITY
MIDDLE EAST RESEARCH CENTER
مركز بحوث الشرق الأوسط
MERC

رئيس مجلس الإدارة

أ.د. غادة فاروق

نائب رئيس الجامعة لشؤون خدمة المجتمع وتنمية البيئة

ورئيس مجلس إدارة المركز

رئيس التحرير **د. حاتم العبد**

مدير مركز بحوث الشرق الأوسط والدراسات المستقبلية

هيئة التحرير

أ.د. السيد عبدالخالق، وزير التعليم العالي الأسبق، مصر

أ.د. أحمد بهاء الدين خيري، نائب وزير التعليم العالي الأسبق، مصر ؛

أ.د. محمد حسام لطفي، جامعة بني سويف، مصر ؛

أ.د. سعيد المصري، جامعة القاهرة، مصر ؛

أ.د. سوزان القليني، جامعة عين شمس، مصر ؛

أ.د. ماهر جميل أبوخوات، عميد كلية الحقوق، جامعة كفرالشيخ، مصر ؛

أ.د. أشرف مؤنس، جامعة عين شمس، مصر ؛

أ.د. حسام طنطاوي، عميد كلية الآثار، جامعة عين شمس، مصر ؛

أ.د. محمد إبراهيم الشافعي، وكيل كلية الحقوق، جامعة عين شمس، مصر

أ.د. تامر عبدالمنعم راضي، جامعة عين شمس، مصر ؛

أ.د. هاجر قلديش، جامعة قرطاج، تونس ؛

Prof. Petr MUZNY، جامعة جنيف، سويسرا ؛

Prof. Gabrielle KAUFMANN-KOHLER، جامعة جنيف، سويسرا ؛

Prof. Farah SAFI، جامعة كليرمون أوفيرني، فرنسا؛

إشراف إداري

أ/ سونيا عبد الحكيم

أمين المركز

إشراف فني

د/ امل حسن

رئيس وحدة التخطيط و المتابعة

سكرتارية التحرير

أ/ ناهد مبارز — رئيس قسم النشر

أ/ راندا نوار — قسم النشر

أ/ زينب أحمد — قسم النشر

أ/ شيماء بكر — قسم النشر

المحرر الفني

أ/ رشا عاطف — رئيس وحدة الدعم الفني

تنفيذ الغلاف والتجهيز والإخراج الفني للمجلة

وحدة الدعم الفني

تدقيق ومراجعة لغوية

د. هند رأفت عبد الفتاح

تصميم الغلاف أ/ أحمد محسن - مطبعة الجامعة

توجه المراسلات الخاصة بالمجلة إلى: د. حاتم العبد، رئيس التحرير merc.director@asu.edu.eg

• وسائل التواصل: البريد الإلكتروني للمجلة: technical.supp.mercj2022@gmail.com

البريد الإلكتروني لوحدة النشر: merc.pub@asu.edu.eg

جامعة عين شمس- شارع الخليفة المأمون- العباسية- القاهرة، جمهورية مصر العربية، ص.ب: 11566

(وحدة النشر - وحدة الدعم الفني) موبايل/ واتساب: 01555343797 (+2)

ترسل الأبحاث من خلال موقع المجلة على بنك المعرفة المصري: www.mercj.journals.ekb.eg

ولن يلتفت إلى الأبحاث المرسلة عن طريق آخر

الرؤيـــة

السعي لتحقيق الريادة في النشر العلمي المتميز في المحتوى والمضمون والتأثير والمرجعية في مجالات منطقة الشرق الأوسط وأقطاره .

الرسالـــة

نشر البحوث العلمية الأصيلة والرصينة والمبتكرة في مجالات الشرق الأوسط وأقطاره في مجالات اختصاص المجلة وفق المعايير والقواعد المهنية العالمية المعمول بها في المجلات المُحَكَّمَة دوليًّا.

الأهـــداف

- نشر البحوث العلمية الأصيلة والرصينة والمبتكرة .
- إتاحة المجال أمام العلماء والباحثين في مجالات اختصاص المجلة في التاريخ والجغرافيا والسياسة والاقتصاد والاجتماع والقانون وعلم النفس واللغة العربية وآدابها واللغة الانجليزية وآدابها ، على المستوى المحلى والإقليمي والعالمي لنشر بحوثهم وإنتاجهم العلمي .
- نشر أبحاث كبار الأساتذة وأبحاث الترقية للسادة الأساتذة المساعدين والسادة المدرسين بمختلف الجامعات المصرية والعربية والأجنبية ٠
- تشجيع ونشر مختلف البحوث المتعلقة بالدراسات المستقبلية والشرق الأوسط وأقطاره ٠
- الإسهام في تنمية مجتمع المعرفة في مجالات اختصاص المجلة من خلال نشر البحوث العلمية الرصينة والمتميزة .

مجلة بحوث الشرق الأوسط

- رئيس التحرير د. حاتم العبد

- الهيئة الاستشارية المصرية وفقًا للترتيب الهجائي:

- أ.د. إبراهيم عبد المنعم سلامة أبو العلا رئيس قسم التاريخ - كلية الآداب - جامعة الأسكندرية - مصر
- أ.د. أحمد الشربيني عميد كلية الآداب السابق - جامعة القاهرة - مصر
- أ.د. أحمد رجب محمد علي رزق عميد كلية الآثار - جامعة القاهرة - مصر
- أ.د. السيد فليفل عميد كلية الدراسات الأفريقية العليا الأسبق - جامعة القاهرة - مصر
- أ.د. إيمان محمد عبد المنعم عامر أستاذ التاريخ الحديث والمعاصر - كلية الآداب - جامعة القاهرة - مصر
- أ.د. أيمن فؤاد سيد رئيس الجمعية المصرية للدراسات التاريخية - مصر
- أ.د. جمال شفيق أحمد عامر كلية الدراسات العليا للطفولة - جامعة عين شمس - مصر
- أ.د. حمدي عبد الرحمن عميد كلية الحقوق الأسبق - جامعة عين شمس - مصر
- أ.د. حنان كامل متولي (قائم بعمل) عميد كلية الآداب - جامعة عين شمس - مصر
- أ.د. صالح حسن المسلوت أستاذ التاريخ والحضارة - كلية اللغة العربية - فرع الزقازيق جامعة الأزهر – مصر وعضو اللجنة العلمية الدائمة لترقية الأساتذة
- أ.د. عادل عبد الحافظ عثمان حمزة كلية الآداب - جامعة المنيا، ومقرر لجنة الترقيات بالمجلس الأعلى للجامعات - مصر
- أ.د. عاصم الدسوقي عميد كلية الآداب الأسبق - جامعة حلوان - مصر
- أ.د. عبد الحميد شلبي كلية اللغة العربية بالمنصورة - جامعة الأزهر - مصر
- أ.د. عفاف سيد صبره كلية الدراسات الإنسانية بنات بالقاهرة - جامعة الأزهر - مصر
- أ.د. عفيفي محمود إبراهيم كلية الآداب - جامعة بنها - مصر
- أ.د. فتحي الشرقاوي نائب رئيس جامعة عين شمس الأسبق - مصر
- أ.د. محمد الخزامي محمد عزيز عميد كلية العلوم الاجتماعية والإنسانية - جامعة الجلالة - مصر
- أ.د. محمد السعيد أحمد كلية التربية - جامعة عين شمس - مصر
- لواء / محمد عبد المقصود رئيس مركز المعلومات ودعم اتخاذ القرار بمجلس الوزراء - مصر
- أ.د. محمد مؤنس عوض كلية الآداب - جامعة عين شمس - مصر
- أ.د. مدحت محمد محمود أبو النصر كلية الخدمة الاجتماعية - جامعة حلوان قطاع الخدمة الاجتماعية بالمجلس الأعلى للجامعات ورئيس لجنة ترقية الأساتذة
- أ.د. مصطفى محمد البغدادي كلية التربية - جامعة عين شمس - مصر
- أ.د. نبيل السيد الطوخي رئيس قسم التاريخ - كلية الآداب - جامعة المنيا - مصر
- أ.د. نهى عثمان عبد اللطيف عزمي كلية السياحة والفنادق - جامعة مدينة السادات - مصر

- الهيئة الاستشارية العربية والدولية وفقًا للترتيب الهجائي:

- أ.د. إبراهيم خليل العَلاّف — جامعة الموصل- العراق
- أ.د. إبراهيم محمد بن حمد المزيني — كلية العلوم الاجتماعية - جامعة الإمام محمد بن سعود الإسلامية- السعودية
- أ.د. أحمد الحسو — جامعة مؤتة- الأردن
  مركز الحسو للدراسات الكمية والتراثية - إنجلترا
- أ.د. أحمد عمر الزيلعي — جامعة الملك سعود- السعودية
  الأمين العام لجمعية التاريخ والآثار التاريخية
- أ.د. عبد الله حميد العتابي — كلية التربية للبنات - جامعة بغداد - العراق
- أ.د. عبد الله سعيد الغامدي — جامعة أم القرى - السعودية
  عضو مجلس كلية التاريخ، ومركز تحقيق التراث بمعهد المخطوطات
- أ.د. فيصل عبد الله الكندري — جامعة الكويت- الكويت
- أ.د. مجدي فارح — رئيس قسم الماجستير والدراسات العليا - جامعة تونس١ - تونس
- أ.د. محمد بهجت قبيسي — جامعة حلب- سوريا
- أ.د. محمود صالح الكروي — كلية العلوم السياسية - جامعة بغداد- العراق

- *Prof. Dr. Albrecht Fuess* — Center for near and Middle Eastem Studies, University of Marburg, Germany
- *Prof. Dr. Andrew J. Smyth* — Southern Connecticut State University, USA
- *Prof. Dr. Graham Loud* — University Of Leeds, UK
- *Prof. Dr. Jeanne Dubino* — Appalachian State University, North Carolina, USA
- *Prof. Dr. Thomas Asbridge* — Queen Mary University of London, UK
- *Prof. Ulrike Freitag* — Institute of Islamic Studies, Belil Frie University, Germany

شروط النشر بالمجلة

- تُعنى المجلة بنشر البحوث المهتمة بمجالات العلوم الإنسانية والأدبية ؛
- يعتمد النشر على رأي اثنين من المحكمين المتخصصين ويتم التحكيم إلكترونيًّا ؛
- تقبل البحوث باللغة العربية أو بإحدى اللغات الأجنبية، **وترسل إلى موقع المجلة على بنك المعرفة المصري ويرفق مع البحث ملف بيانات الباحث يحتوي على عنوان البحث باللغتين العربية والإنجليزية واسم الباحث والتايتل والانتماء المؤسسي باللغتين العربية والإنجليزية، ورقم واتساب، وإيميل الباحث الذي تم التسجيل به على موقع المجلة ؛**
- يشار إلى أن **الهوامش والمراجع في نهاية البحث وليست أسفل الصفحة ؛**
- يكتب الباحث **ملخص باللغة العربية واللغة الإنجليزية** للبحث **صفحة واحدة فقط** لكل ملخص ؛
- بالنسبة للبحث باللغة العربية يكتب على برنامج "**word**" ونمط الخط باللغة العربية **"Simplified Arabic"** وحجم الخط **14** ولا يزيد عدد الأسطر في الصفحة الواحدة عن **25** سطر والهوامش والمراجع خط **Simplified Arabic** حجم الخط 12 ؛
- بالنسبة للبحث باللغة الإنجليزية يكتب على برنامج **word** ونمط الخط **Times New Roman** وحجم الخط **13** ولا يزيد عدد الأسطر عن 25 سطر في الصفحة الواحدة والهوامش والمراجع خط **Times New Roman** حجم الخط 11 ؛
- **(Paper)** مقاس الورق **(B5)** 17.6 × 25 سم، (Margins) الهوامش **2.3 سم** يمينًا ويسارًا، **2 سم** أعلى وأسفل الصفحة، ليصبح مقاس البحث فعلي **(الكلام)** 13×21 سم. (Layout) والنسق: (Header) الرأس 1.25 سم، (Footer) تذييل 2.5 سم ؛
- **مواصفات الفقرة للبحث :** بداية الفقرة First Line = 1.27سم، قبل النص= 0.00، بعد النص = 0.00)، تباعد قبل الفقرة = (6pt) تباعد بعد الفقرة = (0pt)، تباعد الفقرات (مفرد single) ؛
- **مواصفات الفقرة للهوامش والمراجع :** يوضع الرقم بين قوسين هلالي مثل : (1)، بداية الفقرة Hanging = 0.6 سم، قبل النص=0.00، بعد النص = 0.00)، تباعد قبل الفقرة = 0.00 تباعد بعد الفقرة = 0.00، تباعد الفقرات (مفرد single) ؛
- **الجداول والأشكال:** يتم وضع الجداول والأشكال إما في صفحات منفصلة أو وسط النص وفقًا لرؤية الباحث، على أن يكون عرض الجدول أو الشكل لا يزيد عن 13.5 سم بأي حال من الأحوال ؛
- يتم التحقق من صحة الإملاء **على مسئولية الباحث** لتفادي الأخطاء في المصطلحات الفنية ؛
- مدة التحكيم 15 يوم على الأكثر، مدة تعديل البحث بعد التحكيم 15 يوم على الأكثر ؛
- يخضع تسلسل نشر البحوث في أعداد المجلة حسب ما تراه هيئة التحرير من ضرورات علمية وفنية ؛
- المجلة غير ملزمة بإعادة البحوث إلى أصحابها سواء نشرت أم لم تنشر ؛
- تعبر البحوث عن آراء أصحابها وليس عن رأي رئيس التحرير وهيئة التحرير ؛
- **رسوم التحكيم للمصريين 650 جنيه، ولغير المصريين 155 دولار ؛**
- **رسوم النشر للصفحة الواحدة للمصريين 25 جنيه، وغير المصريين 12 دولار ؛**
- الباحث المصري يسدد الرسوم بالجنيه المصري (بالفيزا) بمقر المركز (المقيم بالقاهرة)، أو على حساب حكومي رقم : **(9/450/80772/8) بنك مصر** (المقيم خارج القاهرة) ؛
- الباحث غير المصري يسدد الرسوم بالدولار على حساب حكومي رقم : **(EG710001000100000004082175917) (البنك العربي الأفريقي)** ؛
- **استلام إفادة قبول نشر البحث في خلال 15 يوم من تاريخ سداد رسوم النشر مع ضرورة رفع إيصالات السداد على موقع المجلة ؛**
- **المراسلات :** توجه المراسلات الخاصة بالمجلة إلى: merc.director@asu.edu.eg

السيد الدكتور/ مدير مركز بحوث الشرق الأوسط والدراسات المستقبلية، ورئيس تحرير المجلة
جامعة عين شمس– العباسية– القاهرة – ج. م.ع (ص. ب 11566)
للتواصل والاستفسار عن كل ما يخص الموقع : محمول / واتساب: **01555343797 (2+)**
(وحدة النشر merc.pub@asu.edu.eg) (وحدة الدعم الفني technical.supp.mercj2022@gmail.com)

- ترسل الأبحاث من خلال موقع المجلة على بنك المعرفة المصري: **www.mercj.journals.ekb.eg**

ولن يلتفت إلى الأبحاث المرسلة عن طريق آخر.

محتويات العدد 93

عنوان البحث الصفحة

- **الدراسات القانونية LEGAL STUDIES**

1. **التنظيم القانوني لشركة الشخص الواحد..... 3-68**
خالد عتريس عبد العزيز السيد

- **الدراسات التاريخية HISTORICAL STUDIES**

2. **تجسيد فكرة الصراع والحماية على مشاهد أختام العصر السومري القديم(2900-2371ق.م)- نماذج مختارة من المتحف العراقي..... 71-106**
عباس زويد موان

3. **سيدات الطبقة الوسطى فى الدولة القديمة في الجيزة 107-124**
فاطمة إبراهيم نصار

4. **الردة الفردية في المجتمعات الإسلامية إلى نهاية القرن الخامس الهجري/الحادي عشر الميلادي..... 125-164**
غادة كمال السيد أحمد

- **الدراسات الاجتماعية SOCIAL STUDIES**

5. **وسائل الاتصال الحديثة وتأثيراتها على وظائف الاسرة العمانية 167-208**
خليل بن راشد بن حمدان الخائفي

6. **الشائعات وتأثيراتها على أداء المؤسسات الحكومية في المجتمع العماني. 209-244**
المعتصم ناصر عبد الله الهلالي

- **دراسات علم النفس PSYCHOLOGY STUDIES**

7. **الديناميات النفسية لدى المتحول جنسيًّا من ذكر إلى أنثى «دراسة حالة إكلينيكية» 247-286**
وفاء كمال أحمد درويش

- **الدراسات الإعلامية MEDIA STUDIES**

8. **دور الصفحات الاخبارية بمواقع التواصل الاجتماعي تجاه الوعي بالقضايا السياسية لدى الجمهور المصري 289-334**
نرفانا محمد عبد الكريم قاسم

- **الدراسات اللغوية LINGUISTIC STUDIES**

9. **日本古典文学における桜像に関する一考察 – A Study on The Image of Cherry Blossoms in Classical Japanese Literature دراسة صورة زهرة الكرز في الأدب الياباني الكلاسيكي..... 3-36**
هبة الله أبو بكر محمد

10. **文学 — 近代日本から生まれた芥川龍之介の短編小説 Ryūnosuke —作品にみられる葛藤及び心理変化 A study on » in Modern Japan Akutagawa's Short Stories «conflict and psychological change in his literary works قصص ريونوسيكيه أكوتاغاوا القصيرة في اليابان الحديثة «دراسة حول الصراع والتغير النفسي في أعمال الكاتب» 37-68**
مى سعد أحمد حجازي

افتتاحية العدد 93

يسر مركز بحوث الشرق الأوسط والدراسات المستقبلية صدور العدد **(93 – نوفمبر 2023)** من مجلة المركز « **مجلة بحوث الشرق الأوسط** ». هذه المجلة العريقة التي مر على صدورها حوالي 49 عامًا في خدمة البحث العلمي، ويصدر هذا العدد وهو يحمل بين دافتيه عدة دراسات متخصصة: (دراسات قانونية، دراسات تاريخية، دراسات اجتماعية، دراسات علم نفس، دراسات إعلامية ، دراسات لغوية) ويعد البحث العلمي **Scientific Research** حجر الزاوية والركيزة الأساسية في الارتقاء بالمجتمعات لكي تكون في مصاف الدول المتقدمة.

ولذا تَعتَبر الجامعات أن البحث العلمي من أهم أولوياتها لكي تقود مسيرة التطوير والتحديث عن طريق البحث العلمي في المجالات كافة.

ولذا تهدف مجلة بحوث الشرق الأوسط إلى نشر البحوث العلمية الرصينة والمبتكرة في مختلف مجالات الآداب والعلوم الإنسانية واللغات التي تخدم المعرفة الإنسانية.

والمجلة تطبق معايير النشر العلمي المعتمدة من بنك المعرفة المصري وأكاديمية البحث العلمي، مما جعل الباحثين يتسابقون من كافة الجامعات المصرية ومن الجامعات العربية للنشر في المجلة.

وتحرص المجلة على انتقاء الأبحاث العلمية الجادة والرصينة والمبتكرة للنشر في المجلة كإضافة للمكتبة العلمية وتكون دائمًا في مقدمة المجلات العلمية المماثلة. ولذا نعد بالاستمرارية من أجل مزيد من الإبداع والتميز العلمي.

والله من وراء القصد

رئيس التحرير

د. حاتم العبد